

で、詳細な比較研究ができないのは遺憾なことではあるが、後日機会を得て、より詳しい検討を加えたいものと思っている。

以上の仕事を終えて、布藤・岩槻は11月18日に、福岡は24日に、それぞれ帰国し、4カ月になんなんとする今回の生物調査の現地での作業は終えられた。その間、収集した標本はマラヤのものでは、管束植物を約4000点、蘚苔類を1500包で、目下その整理に大奮となっているところである。

この現地調査は文部省科学研究費補助金（機関研究海外学術調査）によって遂行された。愉快で効果的な仕事を進めることができたのは、団長の芦田理学部長をはじめ、同行の皆さん方と最善の協同作業ができたからだと思っている。また、岩村前所長・本岡教授・バンコク連絡事務所の福井氏夫妻をはじめ東南アジア研究センターの皆さんにもずい分お世話になったし、マラヤ滞在中にはマラヤ大学のStone博士夫妻に大変御厄介をお掛けしてしまった。シンガポールでは植物園腊葉館の人達、就中 Chew 博士にいろんな援助を賜った。これらの方々の御援助がなければ私どもの仕事はその何分の一の成果もあげることではできなかったことと思う。ここに感謝の言葉を述べさせて載いて、現地報告の筆をおく。

（なお、今回の調査については、芦田先生の現地報告と、福岡さんのタイからの報告があり、本稿はその二つの記録の後、最後までを含めたものである。前二報と併せて見て載ければ幸いである。）

インドネシア留学から帰って

野 口 英 雄

1967年1年間のインドネシアのバンドン工科大学における留学から帰って、一般情勢、学校の様子そして私の研究テーマについて等簡単に報告します。

留 学 の 経 過

京都大学東南アジア研究センターの留学生としてバンドン工科大学 Institut Teknologi Bandung（通称 I. T. B. イーテーベー、後述の通り1921年に工業専門学校 Technisch Hoger School として創立され、現在理工学関係の7学部からなる）の芸術・計画学部に入席したのが1967年1月18日でした。そして帰国する1968年1月11日まで、主に建築と都市計画関係の勉強をしました。

最初留学の形式と留学機関について調査をしていた段階で、本岡武教授とプルダニア銀行の人々、石井米雄教授と外務省南東アジア課の人々に御世話になり、在東京インドネシア大使館の人々が非常に好意的に手続きを進めて下さったおかげで手続きは順調に進みました。バンドン工科大学の学長からも私の留学について公私にわたって協力する旨の通信を受けていましたし、事実よく御世話下さい

ました。そして東南アジア研究センター前所長岩村忍教授はじめ諸先生方、建築学教室の増田友也教授と福山敏男教授はじめ諸先生方には出発前と帰国後はもとより現地であっても研究上の注意深い御指導を下さいました。ついでながら現地では、バンドン工科大の諸先生友人達、バンドン市庁の都市計画課の人々、公共事業省研究機関 Regional Housing Center, 教育省国家文化財協会、ジャカルタ首都圏計画局の人々、等々には好意的に資料の提供を受け、研究に参加させていただきました。ジョクジャカルタ、ソロでは、友達の世話で民宿をしながらハマクブオノ家、マクヌガラン家等4家を見、周辺の仏教ヒンズー遺跡を見て回り、ディエン高原近くのウォノソボでも同じ好意を受けました。改めて御礼を述べます。

インドネシアの印象

私の目で見えたインドネシア、とくにジャワ島の一部分の印象¹⁾をふり返ってみようと思います。

私がジャカルタに着いた1967年の1月は、1965年の動乱についてなお政治不安が続き、経済復興の見通しも立たなかった1966年に連続した時期でした。当時の情勢を反映したインフレと盗難には私も少し困りました。後に

- 1) インドネシアの特徴として、ジャワ島がその面積にして非常に狭いにもかかわらず、人口・経済・文化すべての面で集中し、外領の島々にもまして重要であることは多く指摘された事実です。しかし、例えばスマトラのメダンを中心とした北部とパレンバンを中心とした南部、セレベスのマカッサルを中心とした南部等々の地方は非常にひらけているということです。特にスマトラは古くはマレー半島に接近し、また仏教時代はジャワにさきがけてその文化が栄えたと思われまふ。その他非常に多くの地域(島々)の、例えばジャワ島から遠くないスマバワ島、フロレス島、チモール島等々、ジャワやバリ等とはその民家を見る限りにおいてもかなり異質な文明を持つことを考えるなら、まずそれぞれの特異性を見ることが重要だと思われまふ。



写真1 ポゴール宮殿前の庭園

なって分かったのですが、年末から年始に渡る時期は、米の端境期の秋を過ぎてイスラム教徒の正月と重なって、物資の需要が急増するためインフレが急速に進む時期でした。それに輪をかけて連日のデモ騒動があったわけです。

白タクを雇ってバンドンに向けてジャカルタを出発した日には、10月頃に始まり翌年の6月頃まで続く雨季の雨も1日中なく、快晴でそよ風の吹く気持ちの良い日でした。椰子の並木の通りを宮殿と熱帯植物園で有名なボゴールを過ぎて海拔3010mのグヌングデ Gunung Gude (大きい山の意味)の中腹のプンチャクパスを越えてバンドン市への180kmの旅は、もし道中の各所で銃を持った兵士やポリスマンが車を止めることがなかったなら、この上もなく快適な旅だったに違いありません。……それほど、野山の緑は美しく空は澄んでいました。途中の果物の産地チビヌン、ボゴールや良質米の産地チアンジュールの沿道はごみが多く、臭くて、初めての私には決して快くは見えませんでした。それはかえって異国情緒を増すものでした。さきほど乗り込んで来たスカイブルーのベレー帽を被った若い兵士も私がドリアンについて尋ねるとすぐに、山の中であつたにもかかわらず車を止めて買って来て、それをナイフで切り開いてくれました。また彼は運転手と共に私を目

的に届けた後、自分達は友達同志であることを説明し、他人の車に乗り込む非礼を犯したことを詫びて丁寧に礼を言って帰って行きました。……ここまでの挿話を今しばらく象徴的に解していただけるとすれば、その時の私の心の中の明と暗、楽と苦の気持ちの並存状態が説明出来るかと思います。それは天が抜けるかと思われるほど晴れ上がった熱帯の空からにわか大雨を降らすスコールのような。彼らの経済生活においても、どん底にあってむしろ楽天的でした。

ところで、ジャワ島内の交通は国鉄でも私営の長距離バスでも、また、トラックを木造で改造した中距離用のバスやスプルベンと言う名の、ジープ・小型トラック等を改造した約10人乗りのものでも、実によく走っています。しかし、安全性に関しては非常に心配です。鉄道は第一、地盤が弱くその構造が粗末な上にかなり古くて管理も悪いからです。ですからディーゼル機関車の引く急行列車でも蒸気機関車でも鉄橋やトンネルにさしかかる度に停止して、それからゆっくり通過する様は乗っていてさえ滑稽です。バンドンージャカルタ間の180kmを4時間半で走ります。この間はむしろスプルベンのほうが便利です。少し料金は高くなりますが、4時間くらいで飛ばし、そのうえ家から家まで客を運んでくれる利点があるからです。約35人乗りの木造バスは荷物を積み過ぎる上に構造的に充分でないので事故も多かったようです。特に山と谷の多いバンドン周辺では道や橋の構造も自動車向きでなくて、バスのブレーキが効かないためそのまま30mくらい下の谷川に転落して乗客全員死亡の事故を起こしたこともありました。

ジョクジャカルタからバンドンに帰ろうとした時、たまたま雨季の大雨のために1カ月くらい鉄道が不通になったことがあります。

その時に、この区間に3種類の夜行長距離バスのあるのを知りました。一つは兵士の護衛つきで枕もついた最新式の極上のもの、もう一つはプムダエクスプレスと言う名のベンツ社製の少し型の古いバスです。私はこれを利用しましたが、これは鉄道の通っている内陸部を避けてジョクジャカルタから北進してマゲランを通りスマランに出て海岸沿いに一路西進してチルボンまで進み、再び山に入ってバンドンに行くものです。その所要時間は約13時間です。ついでながら、このバスは大急ぎの郵便物を頼むと先方の家に翌日には届けてくれるシステムになっています。ただし料金は速達郵便料の4倍くらいだったと思います。

時間の点ではすべての交通機関が出発地や目的地での危険防止のために、早朝3時ないし6時頃に出発して遅くとも夕方8時には目的地に着くように、また、ノンストップのバスの場合は夜行で走るように、うまく出来ています。

最後に市内では、ジャカルタで以前から、バンドンの場合には1967年10月からバスが運行を始めました。ジョクジャカルタではそこが中距離の木造バスのターミナルになっているおかげで市内でもそれが利用出来ます。ジョクジャカルタとソロの街ではその由緒ある街の風景にふさわしく四輪馬車が走ります。



写真2 中部ジャワの四輪馬車

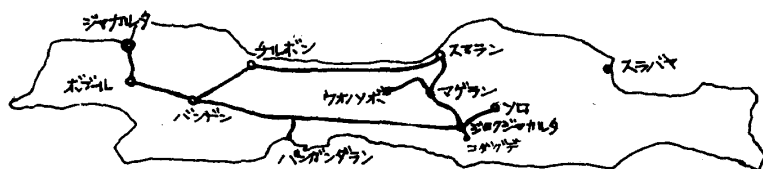


図1 ジャワ島内で私が通った道

一般にどこの町でもベチャと言う名の輪タクが沢山ありますが、起伏の多いバンドンの街では長い距離はこのベチャを乗りつぐこともあり、また、オポレットと言う名のスプルベンよりもっと悪く狭い汚れた車で街の中を数系統のルートで走っているものもあります。これはベチャやドッカール（二輪馬車）より安価でしかも速いので便利です。

建築学科を持つ国立大学について

例年9月に新学期が始まるインドネシアの大学は、1966年のデモ騒ぎで、翌1967年1月に始まることが決定されました。しかしそれにもかかわらず未だ学内の平静を取りもどすに至らず、3月に入ってやっと入学試験をして、新学期の講義が再開されたのは4月に入ってからでした。従って1967年は1学期と2学期の中間の休暇を返上してスケジュールのつまった忙しい年でした。その間は学校によって差があったようです。

ここで建築関係の学科を持つ国立大学を列記しますと、

1. バンドン工科大学 Institut Teknologi Bandung : バンドン
2. インドネシア大学 Universitas Indonesia : ジャカルタ
3. デポヌゴロ大学 Universitas Deponegoro : スマラン
4. ガジャマダ大学 Universitas Gadjamada : ジョクジャカルタ
5. スラカルタ工科大学 Institut Teknologi Surakarta : ソロ
6. ウダヤナ大学 Universitas Udayana :

バリ島デンパサール

7. ハサヌディン大学 Universitas Hasanudin : セレベス島マカッサール

バンドン工科大学は1921年オランダ政府によって工業専門学

校 Technisch Hoog School として創立されて、建築学科は1951年に始まりました。インドネシア大学は1924年に法科大学が、1927年に医科大学が創立されて、建築学科は工学部と共に新しく、1965年に始まって、まだカリキュラムも完備していませんでした。ガジャマダ大学はジョクジャカルタのハマクブオノ家が侯の子弟を教育していた歴史を持つもので、歴史のある中部ジャワの地の利を得てすぐれた大学です。その建築学科もバンドン工科大学を卒業した優秀な若手の人達が教鞭をとっているものです。なおバンドン市にはカトリック系の私立大学パラヒアンガン大学があって建築学科を持っています。

バンドン工科大学

その歴史は前述のように、1921年にオランダ政府による工業専門学校 Technisch Hoog School として創立され、1943年～45年の日本軍による統治時代を経て、1945年～49年には再びオランダ政府の下でインドネシア大学に属し、1949年～59年にはインドネシア新政

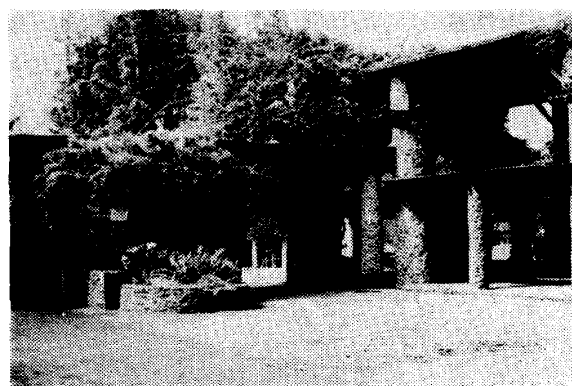


写真3 バンドン工科大学正門



写真4 前面の建物の一部。もっとも高いのが図書館，手前の列は機械工学部。左後方に正門を通る南北の軸線に関して対称の位置に同じ建物が見える。

府によるインドネシア大学に属します。その間、1951年に建築学科が開設されます。1959年には大統領スカルノが母校のバンドン工学部を訪れた際に盛大な祭典が催され、その宣言によってバンドン工科大学としてインドネシア大学から独立します。その時の様子は、演説集等が写真入りで出版されていますので分かると思います。この年1959年には、国連の援助によって地域・都市計画学科 Department of Regional and City Planning が開



写真5 中央ホール内部

設されて、芸術学科 Department Sini Rupa と建築学科 Department Arsitektur と共に芸術・計画学部 Fakultas Sini Rupa dan Merentjanaan として一学部を形成します。そして1967年には第1回創立8年祭 Swindun と建築学科の15年祭が催されました。

学部は

1. 土木工学部
2. 機械・電気工学部
3. 数学・物理学部
4. 鉱物工学部
5. 化学・生物学部
6. 応用物理・化学工学部
7. 芸術・計画学部

の7学部で、教員数約300人で、そのうち教授17人、学生総数約5000人です。

建築学科の教科内容について

いわゆる一般教養科目は、語学すなわち、ドイツ語等は高校で修得する関係上英語のみ、そのほかに社会学や心理学のほかはほとんど課されず、1年生の最初から設計製図とモデリングを含む専門科目が課せられます。なお地域・都市計画学科の場合は、“Principles of Planning”, “Urban Sociology”, “Religion”, “Planning Administrative”, “Land Economics”, “Industrial Location”, “Resources”, “Planning Statistics”, “Sampling Technic”

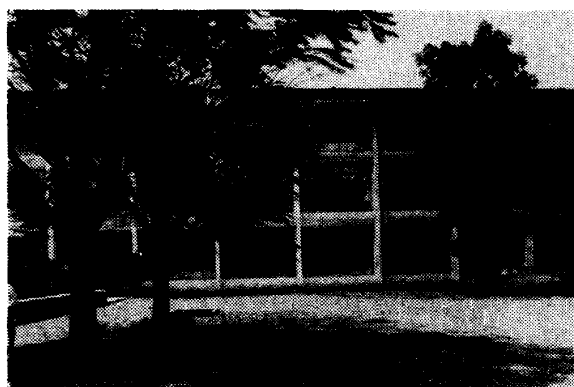


写真6 建築学科

等が修得されます。

その他に週2時間の軍事教練 Kemiliteran と4年生にパンチャシラの学習が課されます。2年生の間には3カ月間の学外実習があってそれを終えるとバチェラーの称号が与えられてそのまま卒業する学生も少数いると聞いています。なお各学科目には、1時間の授業（それが普通ですが）に対して1時間の図書館学習と1時間の自習が義務づけられて、3時間で1単位ということになっていますが、教科書も、まして参考書もそろわない状況ではその規則も名目的でしかないようです。4年生に進んだ学生はその年に6カ月間の学外実習を完全に学校を離れて主に公共機関で行ない、そこで将来の卒業研究の見通しを思索しながら実務を行ないます。その時に少し給金をもらう学生もあり、また、卒業後の就職

の約束をする学生もいたようです。そして5年生で卒業設計とそのための調査研究をします。その際教師の側では2～3人でチームを作り、そのチームで1人または2人の学生の指導をします。テーマの選定はすべて実在のロケーションとシチュエーションを選んでなされるので、港湾や空港関係をテーマとする学生は主にジャカルタに、農業研究所とそれに関連した工場をテーマに選ぶ学生は主にボゴールまたは自分の出身地の外領の島等へという具合に、数カ月間出かけて調査をすることがあったようです。卒業のためにはこの調査レポートを含む卒業設計がもっとも重要視され、その採点は非常に厳格なために毎年50～60人の新入生に対して卒業生は10人前後です。

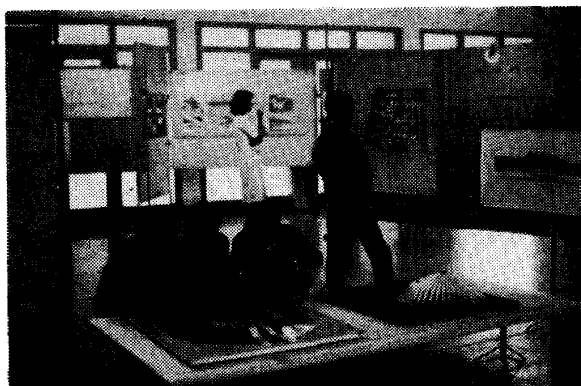


写真7 学生の作品

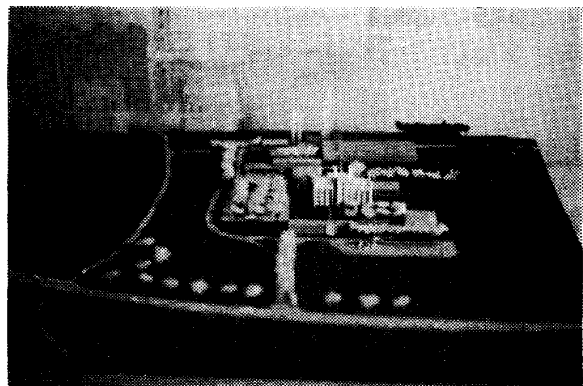


写真8 卒業設計



写真9 芸術学科の廊下



写真10 版画科

中部ジャワのヒンズー・仏教寺院 遺跡について

中部ジャワの歴史についてはまだ不明確な点が多いようです。その理由は第1にインドネシアに古い史書がないことです。モジョパイ Madjapahit 王朝 (1294~1520) のもっとも盛んだった ハヤムヴルク Hayam Wuruk 王の治世 (1350~1389) に書かれた叙事詩 Nagarakertagama にしても、その記事が東部ジャワ時代 (927年頃から) で、しかも東部ジャワに関するもののみのようです。²⁾ 第2に碑文等に年代、王朝と王名等出現するが、それらを完全に連続させるには充分でない。第3に古くはインドと中国に少数のジャワに関する記事があるがそれらも上と同じ状態である。等の理由によって、いちおう年代史は出来上がっているにもかかわらず、現在なお異説が多く出ているようです。例えば、仏教文化がもっとも栄えてボロブドゥル Borobudur はじめカラサン Tjandi Kalasan, パウォン Tjandi Pawon, ムンドゥ Tjandi Mundut, セウ Tjandi Sewu 等の各寺院を建築したとみられる シャイレンドラ Shailendra 王朝 (778年頃~864年または927年頃)³⁾ について

2) 私が現地で見つめた Nagarakertagama についての研究は現代インドネシア学者による政治学的な研究の小範囲のものでした。この点に関しては、N. J. Krom, *Beschrijving van Borobudur*. 1920; 井尻進『ボロブドゥル』上海, 1924; 千原大五郎『ボロブドゥルの建築的研究』1967(京大学位論文); Beruhard H. H. Vlekke, *Nusantara, A History of Indonesia*. Hague and Bandung, 1959 にも述べられている。

3) 778年(サカ紀元700年)は Tjandi Kalasan 出土の碑文中の Panangkarana 大王がターラ女神のために寺院を建立したことが記録されるその年号に基づいたもの。Panangkarana 大王については別に907年(サカ紀元829年)の年号を持つ Kédu 出土の銅板によって、サンジャヤ Sandjaja 王の子で、シャイレンドラ Shailendra 王朝の王であることを知る。

さえその起源は明確でないようです。その王朝は7世紀頃からスマトラ南部のパレンバンを中心とする シュリヴィジャヤ Shrividjaja 王国⁴⁾ の拡大した領土内であるというシュリヴィジャヤ王国説が古くから通説だったようです。その説の第1の根拠は、仏教を信仰するシュリヴィジャヤ王国が8世紀にその領土を著しく拡大したという事実、第2にシャイレンドラ王朝の王達が、スマトラのシュリヴィジャヤ王国と同じ仏教の信者であること。そのことからシャイレンドラ王朝の諸王に先立つサンジャヤ Sandjaja 王(シヴァ教信者でディエン高原 Dieng Plateau の寺院群の建立者であると普通考えられている)は東部ジャワへ移ったとする。等の理由によるものです。また、シャイレンドラ王朝の起源についてはジャワを支配していたカリंगा Kalinga 国⁵⁾ に由来するという説もあるようです。それはマゲラン Magelang 近くのムンティラン Muntilan 南方、チャンガル Tjanggal 出土のサンジャヤ Sandjaja 王の建立した碑文で、732年(サカ紀元654年)の年号を持ち、サンジャヤ王の父のサナハ Sanaha 王が南インドのクニャラ・クニャラ村からジャワに来て建国したという記録と、これと同じ旨の南インドのカリंगाの王が2万人の総勢をひきつれて中部ジャワに移住して来たという伝説⁶⁾ に基づいているものようです。それに反し次の四つの資料を根拠にシュリヴィジャヤ Shrividjaja 王朝は、ディエン高原のシヴァ教寺院群を建立したサンジャヤ Sandjaja

4) 義浄の南海寄帰内法伝(大正蔵第54巻)に「末羅遊州即今屠利逝国」と出てくる。(証聖元年, 695年の頃)

5) 旧唐書 197(貞観14年, 640年の頃), 義浄大唐西域記等に「訶倭国」として出現。

6) 田村隆照「ボロブドゥル彫刻の周辺」『仏教芸術』58 毎日新聞社 参照。

王を継ぐものであるという説⁷⁾があるようです。その四つの資料は、

(1) 前述のチャンガル出土の碑文(732年)：サンジャヤ Sandjaja 王の建立で、インドからサナハ Sanaha 王が来て建国

(2) カラサン出土の碑文(778年)：シャイレンドラ Shailendra 王朝の Panangkarana 大王がターラ女神のための寺院建立

(3) ケルラク Kélurak 出土の刻文：シャイレンドラ王朝のダラニンドラ王の文殊像建立

(4) ケドゥ Kédu 出土の銅板(907年)：サンジャヤ Sandjaja 王に次いでパナムカラナ大王から最後のバリツン王に至る8人の王の名を記す

等のものであります。なお事態をもう少し複雑にする記事があります。それは、サンジャヤ Sandjaja 王に代表される時代すなわちシャイレンドラ Shailendra 王朝以前に、ディエン高原 Dieng Plateau のシヴァ教の寺院群(現在8棟が残っている)は建設され、それは時間的にボロブドゥル Borobudur をはじめとする仏教建築に受け継がれたのだという一般的な考えを否定して、その銘文は809年以前のものではないとするジャンヌ・オーボウィエ教授⁸⁾のものであります。そうすると中部ジャワのカラサン Tjandi Kalasan (女史はなお、Kalasan 出土の778年の碑文は現在の堂の中に包まれるもっと古い堂に関する記事で、現在の堂は850年以前ではないと言う)、パ

7) 前書において田村隆照氏が河本敦夫「ボロブドゥルの浮彫(一)」(『密教研究』89, 1944)に賛同した説です。さらに田村氏は河本教授の労作は「密教的大乗仏教の教理をさぐる」として「印度教と仏教とがこのジャワにおいてどのような関係において習合され、対立を除去していったか」という考証」と紹介している。

8) Jeanne Auboyer, *Les arts de L'Asie Orientale et de L'Extrême-Orient*. 1964, *Que sais-je* No. 77, 真鍋俊照訳『東アジアの美術』1965, 文庫クセジュ 388, 白水社。

ウォン Tjandi Pawon, ムンドゥ Tjandi Mundut, セウ Tjandi Sewu 等の仏教建築を引き継ぐのはディエン高原(シヴァ教)とプランバナ(ヒンズー教)の建築だということになります。建築の表現を見て、カラサン Tjandi Kalasan (仏教で、778年の年号を根拠に中部ジャワの仏教建築中最古と考えられている)はそのすっきりした上方への志向的表現においてプランバナ(ヒンズー教 Tjandi Loro Djonggrang)に通じるものがあり、ディエン高原のものはそのシルエットにおいて東部ジャワ(中部ジャワに次ぐ年代)につながるものを持っているようにも思える。そしてボロブドゥルの隆起した丘の地盤を利用してさえ、そしてあれほど豊かな表現を可能にした文明をもってさえ、その高さ40mの構造物に改造を余儀なくするほどの失敗⁹⁾を犯した技術者達は、内部にせり上がった成の高い室を持つ高さ47mのあのプランバナの Tjandi Loro Djonggrang のシヴァ神のための堂を建設する前に、たとえ小規模であってもカラサン Tjandi Kalasan のような成の高い、内部にせり上がった室を持った堂の経験が必要としたかもしれない。たとえ彼らがそれ以前にインドにおいてもっと困難な仕事に成功していたとしても、ここインドネシアにおける条件は別だっただろう、とも思えるのです。しかし、ディエン高原のビマ Tjandi Bima はその表現においてインドネシアにあってはただ一つ特異で南インドに直接に通じている感じもします。また、以前の堂を新しいより大きい堂が包むことはインドと同じであったかどうか、それは発掘による裏付けを必要とするでしょう。そしてインドネシアにおける宗教史の注意深い研究も、また建築表

9) その最下段には、前面にはるかに出た現在の基段の内側に未完成の浮彫を持つ基段が発見されたことから工事の途中で設計変更がなされたと考えられている。

野口：インドネシア留学から帰って

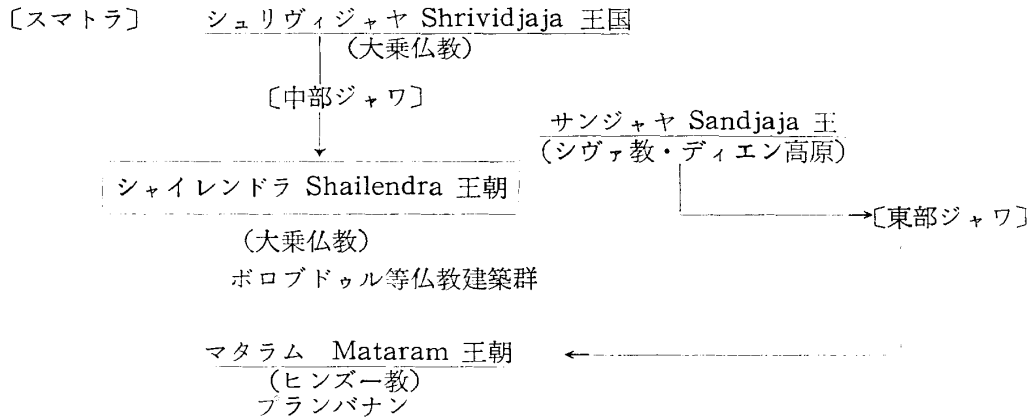


図 2 シャイレンドラ王朝の起源：通説

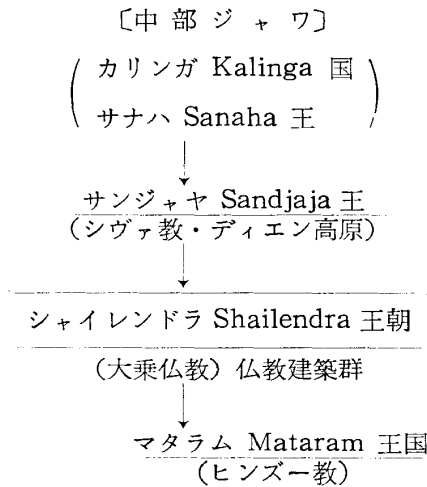


図 3 シャイレンドラ王朝の起源：サンジャヤ王系説

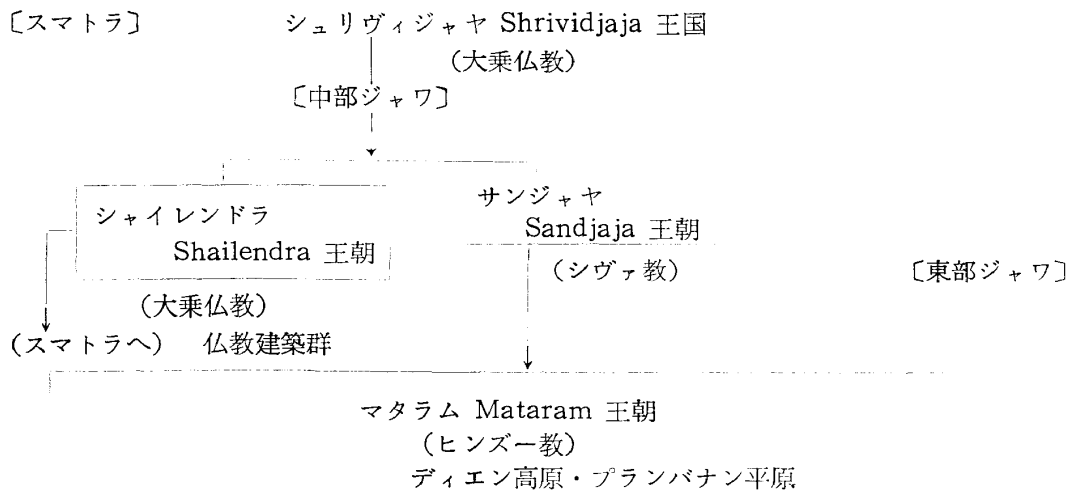


図 4 シャイレンドラ王朝の起源：ジャンヌ・オーボウィエ説

現や技術の面の詳細な調査もかかる事実を発見するのに助けとなることを思えば、まだ結論出来ないように思えます。

ジャンヌ・オーボワイエ教授は、シャイレンドラ王朝について、シャイレンドラ王朝とサンジャヤ Sandjaja 王朝（多分中部ジャワの南部マタラム出身と言う）とは同時代または継続した二つの王家によるもので、共にスマトラのシュリヴィジャヤ Shrividjaja 王国の二つの王朝であるとし、シャイレンドラ王朝の起源についてはシュリヴィジャヤ王国起源説をとりながらも別の新しい見解をとっています。すなわち、850年頃サンジャヤ Sandjaja 氏のある王女がシャイレンドラ Shailendra 氏の一族と結婚した。そしてその10年後にはシャイレンドラ氏が対敵の手に中部ジャワを放棄してスマトラに引退し、そこでインドとの交渉を続けた。中部ジャワに残ったサンジャヤ Sandjaja 氏はマタラム Mataram 王朝の名で中部ジャワと東部ジャワを統治する。すなわち、サンジャヤ王朝、シャイレンドラ王朝時代から、たぶん同じ中部ジャワ出身の別の一王朝が支配していた東部ジャワに食い込んで行くとしています。

ここで歴史的事実の追求の意義をいま一度反省するなら、「現実の容認」¹⁰⁾という文化の受容と発展における一形態がここにも真に適用されるのかどうかという疑問、そして仏教・ヒンズー教を培う段階での彼らの世界観、

- 10) この語は中村元『東洋人の思惟方法3』春秋社、1964の中で仏教の受容形態にあらわれた日本人の思惟方法に関する記述に使用されたもの。インドネシアにおけるヒンズー仏教、そしてイスラム教の受容の仕方について、それらを土着の考え方も含んで柔軟に総合的に吸収していった事実を多くの学者が指摘してきた。このことは現地のインテリ達も認めている。
- 11) かかる観念が建築的に表現されたという前提を立てることは極めて危険だと思われる。従って、表現の内部構造についてはもっと注意深い考察を必要としよう。

その観念の建築における表現方法¹¹⁾を実証せんがための予備作業であると思います。通説で、中部ジャワ最古だと言われるディエン高原のシヴァ寺院群がどう仏教建築群につながり、そしてプランバナシ Plambanan Complex に代表されるヒンズー寺院群につながって行くかという疑問、それと並行して別の関係が浮かび上がって来るかもしれません。何度か盆地に散在する寺院に立ってそれらを見通した時、ヒンズー教のロロジョングラン Tjandi Loro Djonggrang の境内で、その北方にあたかもこのロロジョングランを含んで互いに配置関係を持つかのようにして位置する仏教寺院セウ Tjandi Sewu、プラオサン Tjandi Plaosan 等のことを思い、さらに今も石を切り出しているその南方のラトゥ・ボコ Ratu Boko の宮殿跡の丘をながめ、この丘に登っては今歩いて来たこの寺院群をながめて、また仏教のカラサン Tjandi Kalasan に下ってはやはりこの丘をながめながら、国道を隔てたサリ Tjandi Sari を思い描いてみた時、古代人達は仮にこれらの寺院群に直接的な機能関係がなかったとしても、新しい寺院を建設する度に新しい寺院群の配置における構造関係を構想してみることがなかったであろうかと思ってみたものです。

いま少しジョクジャカルタ周辺概念図を見ながら前述の遺跡群の分布を見たいと思い

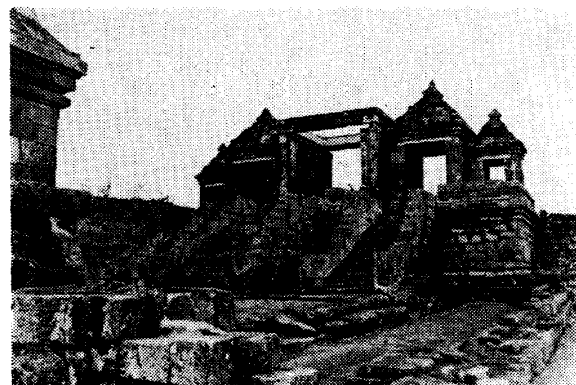


写真11 ラトゥ・ボコ

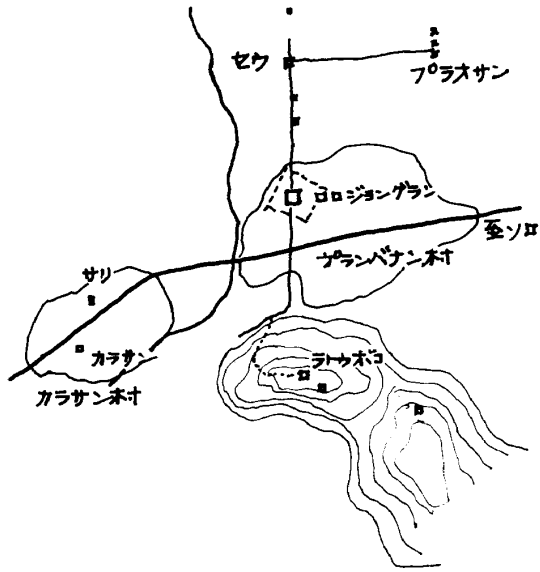


図5 フランバナンの周辺



写真12 ロロジョングラン

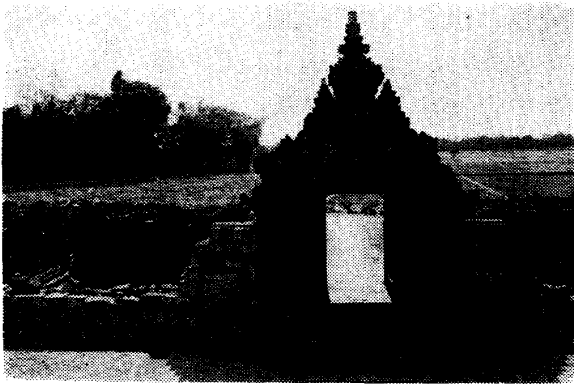


写真13 プラオサン境内から西方を見る

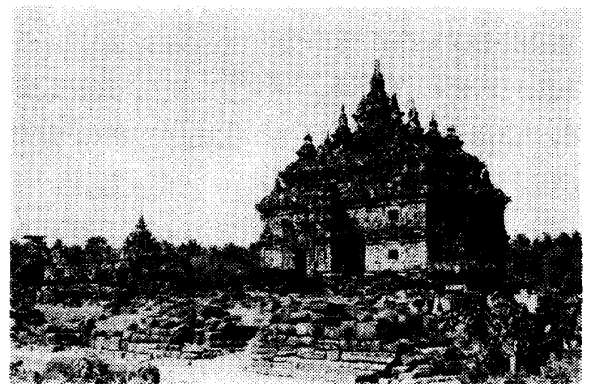


写真14 プラオサン



写真15 ボロブドゥル

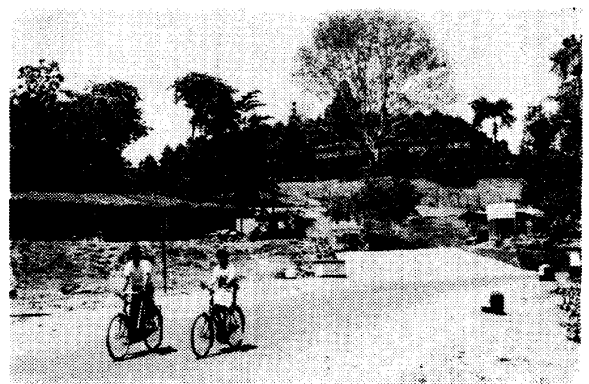


写真16 ボロブドゥル正面

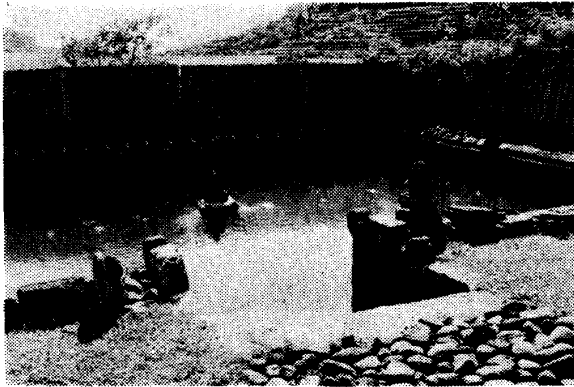


写真17 ウンブル

ます。

ジョクジャカルタ市から マゲラン Magelang 行きの例のトラックを改造した 35人乗りの木造バスで北北東に約 35km の位置、ムンティラン Muntilan の町で、少し小さいバス、ボロブドゥル行きに乗り替えて国道を離れて田圃の中を西南西方に約 10km 走る。そこがムンドゥ Mundut 村です。ここには Tjandi Mundut があり、中の釈伽三尊の完全さは別としても堂のプロポーションは実に美しい。それからプロゴ川の谷を下って再び上るとムンドゥから東方 3 km の地点のブドゥル Budur 村に着きます。バスを降りると前方の丘の椰子の木の間にボロブドゥル Boro-

budur¹²⁾ が迫っています。このボロブドゥルの上の円台まで登って周囲を見渡すとかなり雄大な一区画が東方のメラピ活火山 (海拔 2912m)、ムルバブ山 (3144m)、北方のスミン山 (3373m)、西方のアヤムアヤム山 (1022m) によって限られています。限られているというよりはむしろそれらの個性と謂れを持つ山々を背景とした広い伝説の世界が開けているような感じです。それらの山々は充分高く遠く、シャーベットトーンをしたその山の姿には盆地の静けさに反して何か動きさえ感じるのです。この周辺には沢山の遺跡があります。マゲランで、北方 5km くらいの所に温泉のわく小さい遺跡のあることを聞いて早速行ってみました。国道から 1km 足らず谷に下った田圃の中にウンブル Tjandi Umbul があり、おそらく最初から温泉のわくこの場所に小さい堂を建立したものだだろうと思われました。そこにあるいくつかの彫刻は他のものと大差のない様式を示しているようでした。ジョクジャカルタから右にメラピ山、ムルバブ山の迫るのを見ながら北方 40 km のマゲラン Magelang までバスで行き、さらにそこからスプルベンで 10km のスチャン Setjang から北東に入って登り、スミン山 (3373m) とシンドロ山 (3138m) の中間を 50km くらい登った所が高原の町ウォノソボ Wonosobo です。シヴァ教遺跡が現在 8 堂保存されているディエン高原 Dieng Plateau は、この町から 20km 登った海拔 2000m 以上の地点です。現在ここへはウォノソボから

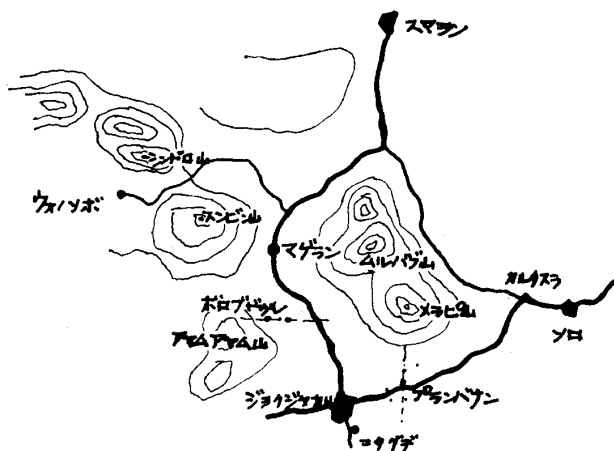


図6 ジョクジャカルタ周辺

12) 古く、1814年イギリス人東印度会社副総督 Sir Thomas Stamford Raffles の指導で発見されて後、多くの学者達の研究と発掘調査、保存がなされた。オランダ人 Van Erp が、1897年以降の復元工事中に測量器でムンドゥ Tjandi Mundut を覗いた時、それらの中間にあるパウオン Tjandi Pawon が一直線上にあることを発見した。その事と、インドおよび日本の寺院配置を考慮して、ここに伽藍配置を想定したのは、千原大五郎、前掲書、p. 129 である。

毎日1往復のトラックが出ているのですが、私の行った時はそのトラックが故障したということで冷い雨の中を2日間待って果たせず、ウォノソボから引き上げて帰って来ました。このウォノソボおよびディエン高原に入るためには一定の機関の証明書が必要で、それを知らず町に入った私は警察との交渉が大変でした。

ジョクジャカルタから北西方、ソロ行きのバスで15kmの地点がプランバナナン Prambanan 村で、ここにロロジョングラン Tjandi Loro Djonggrang をはじめその周辺に前述の寺院群があります。セウ Tjandi Sewu にしても、プラオサン Tjandi Plaosan にしても、その他沢山の堂が、あるものは仏像を含んで、おそらく風雨と時に地震のために崩れ落ちたままになっています。プラオサンだけは3室の連続した堂1棟だけが復元されています。

プラオサン村から2頭の白牛が引く大きな牛車に便乗して3kmほどジョクジャカルタ側に帰った所がカラサン村で国道を10kmほど入って道からすぐ見える所に Tjandi Kalasan があります。堂の上部と背後の室が崩

れ落ちていますが、背の高く美しい建物だと思います。国道を隔てて火山灰のぼこぼこ道を北へ入るとプラオサンと良く似た、中が3室になったサリ Tjandi Sari があってよく修復されています。ここからさきほどの国道を田圃の中のまったく平坦な道を北東へ40km 進みスラカルタ Surakarta (ソロ)の古い町であるカルタスラ Kartasura に出て、さらに東に10kmの地点が、あの広々とした感じのソロです。

ソロとジョクジャカルタのクラトン建築について

中部ジャワのイスラムのマタラム Mataram 王国(1575~1755, 古く864年頃のマタラム王朝の末裔かもしれない)は、1755年にスナン領スラカルタ Soesoengabied Surakarta (パクブオノ家)とスルタン領ジョクジャカルタ Sultanaat Jogjakarta (ハマンクブオノ家)、それにソロのマンクヌガラン領 Mankoenagaran とに3分されます。オランダ統治政策による地方分権法(1903)と東インド国家組織法(1925)の2法によってジャワ島内は、3直轄地と2自治領に分類され、

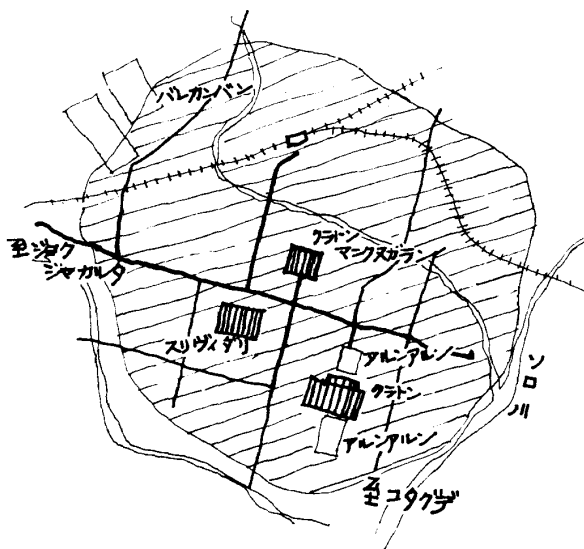


図7 ソロ市概念図

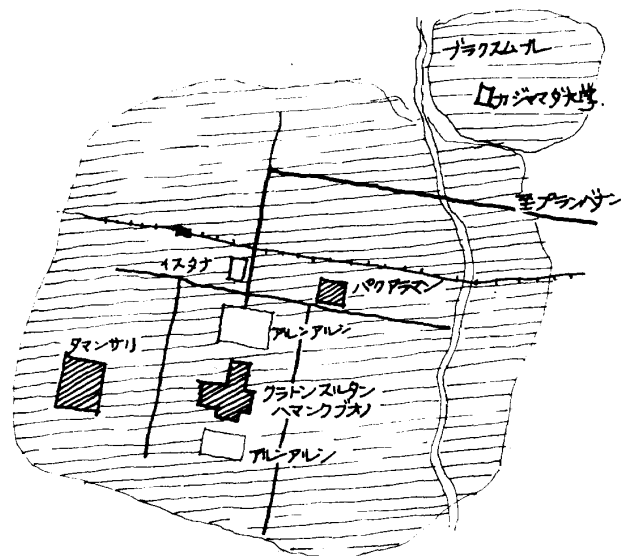


図8 ジョクジャカルタ市概念図

このスラカルタとジョクジャカルタがその二つの自治領です。その侯の邸宅すなわち多くの従者・工人達の職場や住宅に至るまで含むかなり大きな一区画、それがクラトン Kraton

と呼ばれるものです。ジョクジャカルタにはもう1家、パクアラマン Paku Alaman 家があって、オランダの植民政策によって各2家ずつを対立させたものだということです。ハマクブオノ家は最大で、古くは野外の大浴場や、水を建築群の内部に配したり床の下に流したりした水宮と呼ぶ離宮を持っていたようです。この水宮は今は放棄されてタマンサリ Taman Sari (公園の意味) という遺跡になっています。現在でも、アルンアルン Alun-alun (広場) に面したプンドポ pundopo (接客用の大広間) をガジャマダ大学の法経学部に開放し、博物館と図書館をその北に持っているほどです。邸内には伝統衣装を着けた多くの従者達が各々の持場を守っています。私達が何かものを尋ねるとジャワ語の宮殿語—それは丁寧で耳に非常に快く響くものですが—でゆっくり説明し、また数十人の楽士達が奏するガメラ音楽が静かに流れています。これらの邸には、あらかじめ権威筋の紹介状を持って許可を取っておけば一定の場所に限り見せてくれますが、特にソロのマクヌガラン家では Prince Raditio 氏の御好意で、侯の寝所に至るまで見せていただくことが出来ました。

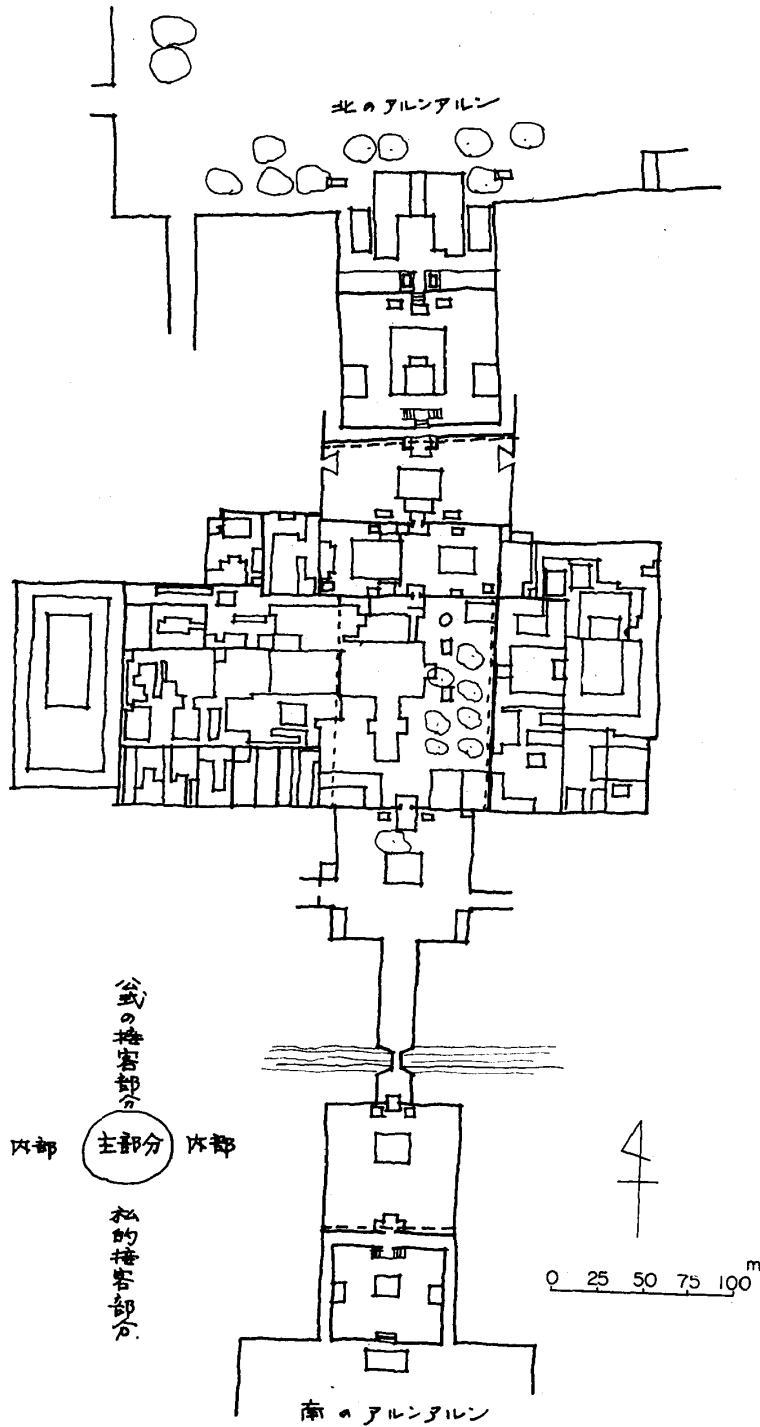


図9 クラトン・スルタン・ハマクブオノ配置図



写真18 クラトン正面

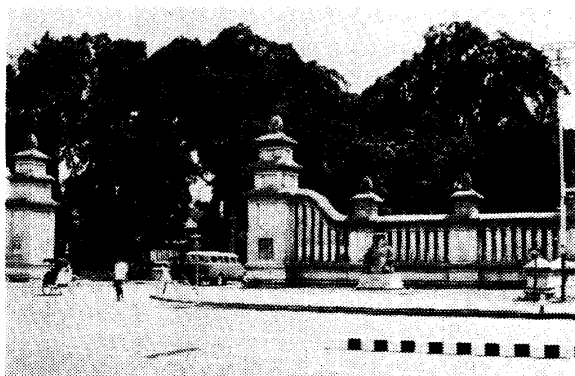


写真19 ソロクラトンススナン正面

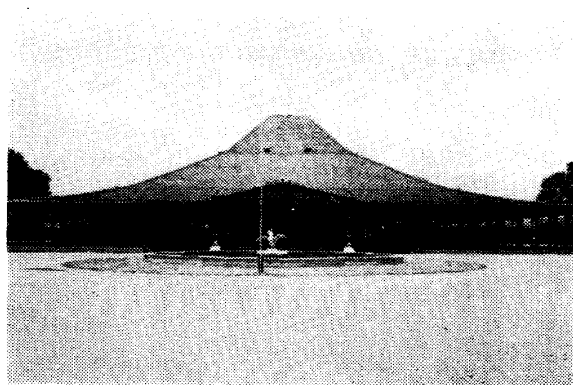


写真20 ソロマンクヌガランの正門プンドボ

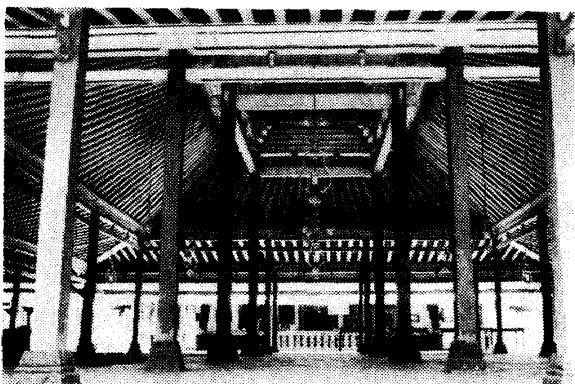


写真21 プンドボ内部

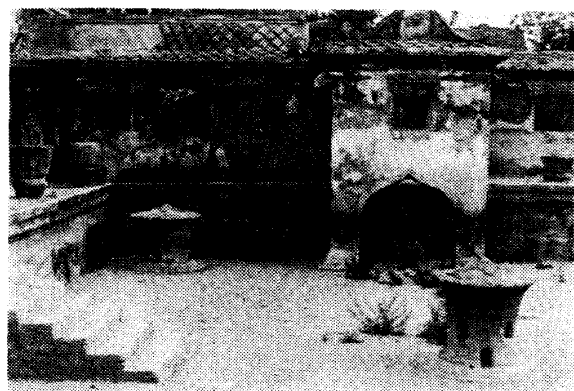


写真22 ジョクジャカルタ、タマンサリの
野外大浴場

む す び

バンドン、ジャカルタ、ジョクジャカルタの都市計画等に関して、去る3月7日京大東南アジア研究センターの研究例会で報告したことの一部はここで省略しました。

最後に、関係の各位に、またバンドン市でほとんど1年間家族同様に私の身の回りのことをお世話下さった今井忠治先生御夫妻に、紙上をもって御礼申し上げます。